
ドロップ

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドロップ

【Nコード】

N3003S

【作者名】

午雲

【あらすじ】

彼女はドロップが好物である。俺が飴ちゃんとかアメ玉とか呼ぶと、躍起になって怒りだす程に、！。

彼女には奇妙がクセが有る。

煙草も吸わないし、酒も飲まない。

ただ、気が付くと何時もドロップを口に含んで居る。

（よく飴ちゃん食べながら、しゃべれるな。）

と俺は思う。

頬にアメ玉大の膨らみが出来るから、

しゃべりながらも口の中で転がして居るのは確かだ。

「おまえ器用だな、邪魔にならないのか？」

「あ、これ？」

彼女は舌の上にアメ玉を載せて、いたずらっぽく笑ってみせる。

「わたし慣れてるから。邪魔になんてなりっこないわよ。」

慣れてると聞いて、俺は耳をそばだてる。

「アメ玉に慣れてるなんてあるのか？」

「アメ玉じゃないわ・・・ドロップよ。」

そう注意する彼女。

(どっちでも同じじゃないか。)

俺は口の中でつぶやく。

「・・・同じじゃないわ・・・」

(ん!?)

思わずドキリとする俺を、彼女が見返す。

「わたしにとってはドロップは友達みたいなもの・・・涙の粒・・・
ティア・ドロップ・・・」

遠くを見る眼差しになって、彼女がひとりごつ。

「・・・口がさみしいのよ。」

取り繕うように、そう言い直して、

彼女はお気に入りのドロップの缶を取り出し、

カラカラと振ってみせた。

その音は何故だか俺の耳の奥に、いつまでも残って居た。

彼女がドロップを手放せない訳。

それが気に掛かって、俺は、さりげなく調べてみた。

実は共通の友人が、彼女の幼馴染みでもあるのだ。

親友として、いつも彼女のことを気に懸け、

俺に対しても、同じく善き友人たろうと心掛けて居た。

「ごめん、俺たちばかり仲良くしちゃって。」

「気にしないで。知り合いの知り合いは、みんな知り合いだから。」

三人で過ごして居る時、そんな会話を何度も交わしたことがある。

どうやら、それがその娘のポリシーらしい。

なんとか口実をつけて、その娘と待ち合わせる。

「どういう風の吹きまわし？あなたから私を誘うなんて。」

「いっとくけど、下心は無いからな。」

「あら、わかってるわよ。あの子の彼氏だもん。」

（そうあっさり言われるとな・・・）

露ほども動揺をみせないとなると、男のプライドがちよっと疼く。

まあ、あれだけ見せつけておいて、そんなことを考える方が、どうかして居るけれど。

むろん、そんな心の内は、おくびにも出さないで、

俺は彼女の幼い頃の話しへと、二人の話題を持っていた。

「ドロップの丸みが、こう頬の上にさ・・・」

「うわ、なんだかHね？」

「へ!？」

「あ、ゴメンなさい。でも、昔からよ、あの子がドロップを特別、好きなのは、ー。」

聞けば、彼女がドロップを持ち歩いて居るのは、幼い頃から有名だったらしい。

両親が共働きで、カギっ子だった彼女は、ー

いつも最後まで公園に居て、遊びたがる子供だった。

(・・・そういえば、ひとりっ子とか言ってたっけ・・・)

ガランとした家のなかにひとりきり・・・

ドロップの缶をもてあそび、

大事そうにひと粒、口に含んでは、

小さく小さくなるまでドロップをなめて、

絶え間なき不安な気持ちをやり過ごす。

何の前触れもなく、

彼女の、そんな幼い頃の姿が、眼の奥に浮かび上がってきて、

（はっ！？）

内心、俺は胸が痛んだ。

ゆくゆくは親友の婚約者と見定めて、――

まるで仲人でも引き受けたかのように、――

彼女との思い出話しの数々を得意げに語ってくれる。

まるで今見て来たような、熱心な話しっぷりに、――

俺も何だか一緒にその場に居たかのような錯覚すらおぼえた。

（よっぽど仲がよかったんだな、この二人・・・）

そんな、彼女の幼馴染みの話しに耳を傾けながら、

俺は、今更ながら、その事を思い出して居た。

そして迎えたゴールデン・ウィーク。

まとまった休みが取れたので、

俺は彼女を夜景が観えるレストランへ誘った。

「・・・いやあ、待たせたね!」

「こんな場所で待ち合わせなんて・・・こういう風の吹きまわし?」

「・・・プレゼントがあるのさ。」

「え?」

俺は胸ポケットから、ドロップの缶を取り出す。

「・・・からかってるの?」

さすがに彼女は口をとがらす。

「いくらわたしがドロップがトレードマークだからって!」

皆まで言わせず、俺は彼女の手の内に、

そのドロップの缶を握らせた。

「・・・振って御覧。」

（いつかみたいに・・・）

「こう？」

言う通り、素直に振ってみせる彼女。

（カランカラン）

（！？）

「この音・・・ドロップじゃないわね？」

缶を耳もとに当てながら、彼女がいう。

「わかるか。」

「わかるわよ。」

拗ねたように、俺へ向かって、ちょっと片頬をふくらます。

「・・・ドロップとの付き合いは長いんだから！」

そうひと言付け足して、ちらっと耳もとへ目をそらす。

「おい、その中身、間違っても飲み込んだりしないでくれよ。」

「・・・え！？」

俺の台詞に、

彼女が眼を丸くする。

（ドロップはドロップでも・・・）

（・・・そんなに安い代物じゃないからな・・・）

俺は口辺からこぼれようとする笑みをこらえるのに、苦勞する。

まさか、こんなに早く覺られてしまつては、もったいない。

お楽しみは、これからだからだ。

その代わり、

そのとき最早、俺の財布の中身が、

雀の涙となっていたコトは、

その日、彼女には絶対に、内緒だった。

（おわり。）

(後書き)

ティア・ドロップというのが「ドロップ」という商品名の由来・
なのだから(↑洒落てます)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3003s/>

ドロップ

2011年10月5日15時01分発行